

SPOD-FDにおける調査研究の取組と意義

吉田博・飯尾健・塩川奈々美(徳島大学) 仲道雅輝・上月翔太・村田晋也(愛媛大学) 杉田郁代(高知大学)

1. はじめに

(1) FDを取り巻く背景

◆政策への対応

- 「教学マネジメントを支える基盤としてのFD」(『教学マネジメント指針』)、大学院生を対象としたプレFDの情報提供・実施の努力義務化(大学院設置基準)、指導補助者に対する研修の義務化への対応が求められている。また、基幹教員制度の新設及び実務家教員登用が促進されており、大学教員の多様化が進んでいる(大学設置基準)。

◆オンラインを活用した教育の展開

- アフターコロナを迎え、学生の学習効果を高めるために、効果的にオンライン技術を活用した授業展開が求められている。

◆生成AI等の技術躍進への対応

- チャットGPT等の台頭により、効果的な活用、不正防止、課題作成等における工夫が求められるようになってきている。

- FD担当者、FD等担当組織の役割が拡大している
- 試行的取組や実践知の集結がより求められている

(2) SPOD及びSPODの特徴

◆四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)

- 学生の豊かな学びと成長を支援する、実践的力量をもった「高等教育のプロフェッショナル」を四国から輩出することを目指し、加盟校が協力・連携して、教職員の能力開発(FD・SD)に取組むネットワークである。
- 2008年に発足し、2023年度現在35の高等教育機関が加盟している。

◆SPODの特徴

- 四国地区のほとんどの高等教育機関が加盟している。
- 4つの各県に存在するコア校は、教育開発に関わる専任教員を有するセンターを持つ、同規模の国立総合大学で、コア校を中心とした運営体制がとられている。
- コア校の担当者が「SPODフォーラム」、「SPOD講師派遣プログラム」、「各大学のSPOD開放プログラム」を担当し、加盟校にFD・SDを提供している。
- コア校を除く加盟校には小規模校が多く存在している。
- 「総会」、「FD/SD各分科会」、「ネットワークコア会議」、「FD/SD各専門部会」、「各県下SPOD担当者連絡会議」等により、加盟校担当者の意見交換、情報共有の機会がある。

- SPODは四国地区のFD・SDを支える基盤となっている

2. SPOD-FDの調査研究プロジェクト

(1) 目的とこれまでの取組み

SPOD事業におけるこれまでの取組成果について、連携効果および組織変容の検証のために、2011年度ネットワークコア運営協議会の下に設置された。

- 「新任教員研修の効果」(徳島大学)
 - ✓リーフレットの作成(2013年)
 - ✓大学教育研究フォーラムにおける口頭発表(2014年)
- 「SPOD講師派遣事業による組織変容」(高知大学)
 - ✓SPODフォーラムにおけるポスター発表(2016年)



(2) 現在の取組み(2022年度)

- 各コア校のFD担当者の専門性を活かし、大学を超えて連携して共同で実施
- SPODの将来構想・FD事業と関連させ、プロジェクトによる探索的開発と直結

5つのテーマごとに**チームを作り、具体的な調査・開発・研究・成果発表**を行う。

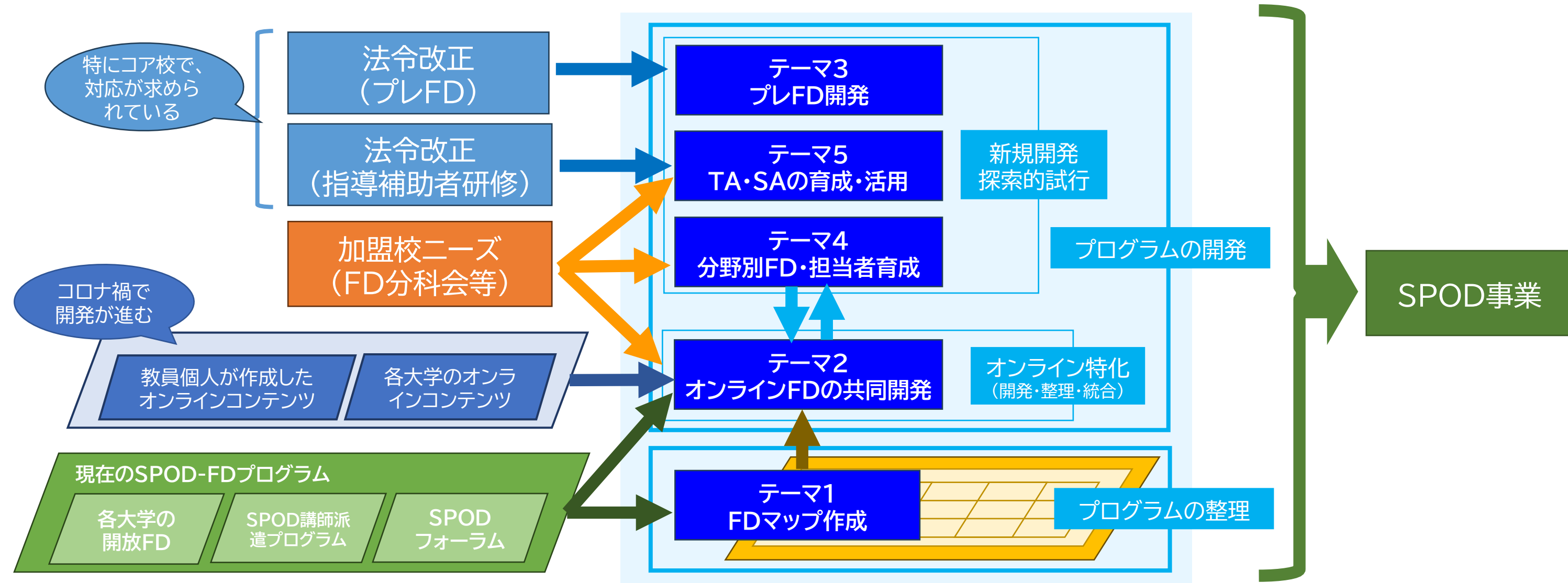
テーマ1:SPOD-FDマップ作成

テーマ2:オンラインによるFDプログラムの共同開発

テーマ3:大学院生を対象としたプレFD開発

テーマ4:分野別FDプログラム開発・FD担当者養成

テーマ5:TA・SAを活用した教育の質向上



(3) 調査研究プロジェクトの意義

(テーマ1)FDマップの作成は、各コア校の担当者による共同開発であったことで、**マップ作成の取組そのものが、SPOD事業の振り返り、整理、成果や課題可視化、議論になった**。また、テーマ2-4の議論の起点となつた。

(テーマ2)オンラインを活用することで、物理的・時間的な制約を超えて、**全加盟校の教員それぞれのニーズに合わせたFDコンテンツを届けることができる**ことができる。

(テーマ4)**加盟校ニーズが高い分野別FD**(実際、複数機関から要望として挙げられている)、**加盟校のFD担当者養成**を進めることができる。

(テーマ3,5)**各コア校が抱える共通の課題**(TA研修、TA制度、プレFD等)について、**共同で開発、研究、情報収集、試行**を行うことができる。

3. 2022年度の実績と今後の予定

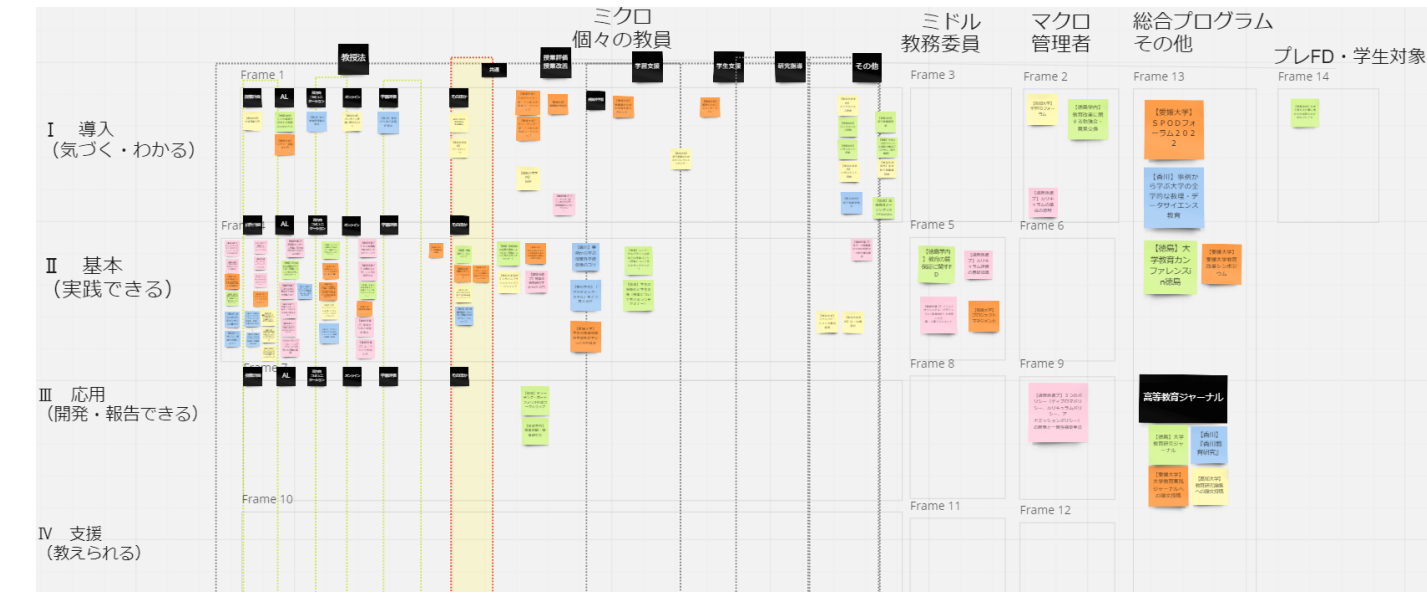
(1) テーマ1:SPOD-FDマップ作成

◆これまでの実績

- SPODで実施している「各大学の開放FDプログラム」、「SPODフォーラム2022」、「SPOD講師派遣プログラム」について整理し、「2022年度SPOD-FDマップ」を完成とした → <https://miro.com/app/board/uXjVP0gWCC0=/>(編集不可)
- 「第18回大学教育カンファレンスin徳島」(2022年12月27日開催)において研究発表する

◆今後の予定

- マップの各項目のプログラム数を明示
- ガイドブックと整合性の確認(レベル・フェーズ)
- 2023年度SPOD-FDマップの作成
- HP等での公開を検討
- 成果を論文等で発表



(2) テーマ2:オンラインによるFDプログラムの共同開発

◆これまでの実績

- オンラインFDの範囲や定義について検討
 - 非同同期型(動画・文書等のオンデマンドで視聴・閲覧できるコンテンツ)を対象とする
 - 各大学のホームページ上にあるテキストや画像を用いたTips・資料も含める
 - 一般公開されているコンテンツを収集・整理の基本的な対象とする

◆今後の予定

- タスク1:各大学がすでに実施しているオンデマンドコンテンツの洗い出し
 - タスク2:公開可能なコンテンツをプラットフォームに整理して公開
 - タスク3:必要であるが、存在しない/公開されていないコンテンツの新規開発
 - タスク4:ニーズに合わせた新規コンテンツの開発
 - タスク5:各コンテンツにおけるFDや実践事例を収集し、プラットフォームに掲載
- ※現在タスク1に着手、令和6年度までにタスク3の完了を目指す

(3) テーマ3:大学院生を対象としたプレFDプログラムの開発

◆これまでの実績

- 先進事例調査:京都大学(2月7日・8日)、大阪大学(2月16日・17日)
- 関連テーマのシンポジウム参加:東京工業大学(1月26日)

◆今後の予定

- 2023年9月に愛媛大学において、教授法がメインとなる大学院生(研究員、ポストドクター等を含む)向けプレFD研修を実施予定である。SPODコア校の大学院生にも開放し、参加希望者の受け入れを行う。
- プレFD参加者へのインタビューによるプログラムの評価とニーズ把握を実施
- 上級者TA(TFなど)の指導補助者としての資格認定や研修について、可能であれば統一的な規格が設定できることができると望ましい。
- 研究大学中心に展開されてきたプレFDの地方大学モデルの構築を目指す。

(4) テーマ4:分野別FDプログラム開発・FD担当者養成

◆これまでの実績

- SPODフォーラム2022において「FD担当者養成研修」を実施し、19名が参加。参加者はFDや企画についての講義を受けた後、自身の所属校のFDニーズ・課題を整理し、具体的なFD研修の企画を考案、参加者間で共有するワークに取り組んだ。

◆今後の予定

- SPODフォーラム2023にて引き続き「FD担当者養成研修」を実施する。
- 各大学のFDリーダー養成の取組に関する調査の実施。
- FDプログラム開発を行う分野の検討、決定およびワークショップ等の企画。

(5) テーマ5:TA・SAを活用した教育の質向上

◆これまでの実績

- 先進事例調査:大阪大学(2月16日・17日)
- 文献調査:佐藤万知編(2019)『SA/TA 制度を活用した大学教育の質向上への挑戦』等、代表的な文献をチームメンバー内で確認
- 上記までを参考に、実態調査用のアンケートフォームを作成中

◆今後の予定

- SPOD加盟校を対象としたアンケート調査を行い、TA・SA制度の有無やそのニーズ、TA・SAを対象とした研修プログラムやガイダンス、テキストやハンドブック等の有無、運用に関わる工夫や課題等について実態を明らかにする。
- SPOD外でも先進的な取り組みの見られる大学等を対象に調査を計画する。
- 「SPODフォーラム2024」のポスターセッションにて調査結果公表予定。
- 同フォーラムにてFDプログラムの実施を目指す。

4. 調査研究プロジェクトの今後の展望と課題

◆調査研究の成果を活用する

- すでに作成している「**FDマップ**」は、**SPOD-FDプログラムを体系的に提示することや、HP等で公開する**などを具体的に検討する必要がある。テーマ2~4の取組で開発したFD等についても、**実践の共有、成果物の公開**を具体的に検討する必要がある。

◆コア校以外の加盟校の担当者や教職員を巻き込む

- オンライン等を活用することで、多様な専門性を持つ教職員が関われるように、**コア校以外にも積極的な働きかけを行い、関わる教職員個人とSPOD組織の双方にメリットがある体制**を作りたい。

◆リーダーシップと負担ない遂行のバランスをとる

- FD専門部会構成員が**調査研究プロジェクトに取り組むことに対する、動機づけを高めることができるように**、FD専門部会長は各大学の課題、各メンバーの日常業務も把握しつつ、進める必要がある。